



コミュニケーション分断の世界で

盛岡YMCAに集う関係者の皆さま、あけましておめでとうございます。年頭に当たって、一言、所感を申し上げます。

いささか、唐突な書き出しとなりますが、井上ひさしの作品に『國語元年』という戯曲があります。かつて、ドラマ化されて、NHKで放映されたこともありますので、ご記憶されている方もおられるかと思えます。この戯曲の主人公は、南郷清之輔という明治新政府の文部官僚で、政府から「全国統一話し言葉」の制定を下命された人物という役柄です。当時の日本は、長く続いた幕藩体制の影響もあり、言葉といえば、東京も含めて一部の地域でしか通じないお国言葉ばかりでした。しかし、それは欧米列強に比肩し得る近代国家、とりわけ近代的な軍隊の創設を目指す政府にとって、はなはだ不都合な状況でした。戦場において、銘々が異国語ほどに異なるお国言葉で話していたのではコミュニケーションが成り立たず、軍隊は機能しません。そこで、主人公に重大任務が与えられたというわけです。劇中では、様々な地方の出身で、話し言葉も異なる親族や奉公人、それに居候学者や強盗犯などが、統一国語をめぐる抱腹絶倒の大騒動を展開することになります。多様なお国言葉や文明開化語なる急ごしらえのハイブリッド語が飛び交い交差する中で言葉の本質や捉えどころのなさが浮かび上がってきます。いつの間にか、作者の研ぎ澄まされた言語感覚の世界に引きずり込まれる不思議な作品です。

さて、この作品から連想するものに創世記第11章に描かれた「バベルの塔」の説話があります。古代の世界も国や地域によって多様な言語や方言が使用されていたことは想像に難くなく、なぜ、言葉がばらばらになったのかという問いに答える起源譚として伝承された物語であったと思われます。創世記の編者は、この説話を「人間の神からの離脱」「自己絶対化」の文脈に位置付け、神の裁きの結果、コミュニケーションが分断された存在として人間を描いています。しかし、ここに描かれたコミュニケーションの分断は、単に古代世界の出来事にとどまるものではありません。むしろ、グローバル化が進み、飛躍的に人口移動や情報流通が進んだ現代においてこそ、私たちの上に重くのしかかっている現象と思われます。

私たちの世界では、多くの国家や国民が自国の利益のみを追求し、自身の優位性を声高に主張します。私たちもそのような状況の中で、他者の姿が見えず、声を聴くこともできない分け隔てられた世界の住人となってしまっているのではないかと思います。

私たちが集うYMCAは、権力からも経済力からも縁遠い存在ですが、言語や民族、社会階層を越えて、人と人とのコミュニケーションを築き上げようとしている運動体です。

昨年、全国のYMCAがブランディングということで、ロゴマークや標語を統一し、連帯と一致を再確認したところですが、ブランディングの最大の意義は、全国のYMCAが「内なる共通言語」を獲得し、それを市民社会に広く発信したという点にあります。しかも、その共通言語は、それまで各地のYMCAがあたかも方言のように語り継いできた独自の理念や目標を打ち消すものとしてではなく、むしろ、それらを包摂するものとして表白されたものと考えられます。

盛岡YMCAは、長年、「きみでいいんだよ」というキャッチフレーズを掲げ、互いの存在を肯定し合い、必要とするすべての人に居場所を提供できる組織となることを目指してまいりました。人々が分断された現代社会において、そうした方向性は一層重要さを増しているように思われます。それを追求していくことは、全国で統一された標語の実現にとっても有効なアプローチとなるに違いありません。本年も盛岡YMCAは、関わるすべての人の個性が豊かに発揮され、互いにエンパワーされるようなプログラムを進めてまいりたいと思います。皆様の一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

盛岡YMCA 理事長
うおずみ ひであき
魚住 英昭

